

電子オルガンの啓蒙活動

～安井正規の電子オルガンコンサートの実践記録～

安井 正規

「月曜から夜ふかし」という全国ネット TV 番組の「ブームが去ったものを調査した件」というコーナーで「エレクトーン」が取り上げられていた。筆者のように電子オルガンのブームそのものを知らない世代にとって、いまいちピンとこない内容であったが、社会的にはそのように認識されているのであろう。

他にも、「昭和なレトロな感じ」とか「音楽教室の教育楽器」というイメージであると色々な意見をインターネットその他で多くの人が発信している。勿論、現在でも電子オルガンには、一定数の愛好家や学習者がいるのだが、社会的に上記のようなイメージを持たれたり、レッテルが貼られたりしている現実を目を背けるわけにはいかない。

今年の夏に名古屋・栄にある三井住友銀行 SMBC パーク栄で電子オルガンのソロコンサートの機会を頂き、このコンサートのレポートとともに筆者がどのような視点で、電子オルガン奏者として電子オルガンのイメージアップ、啓蒙活動を行っているかを綴りたいと思う。

開発が急ピッチで進む名古屋駅周辺とともに名古屋の繁華街の顔ともいえる町、栄。その中央に立地する三井住友銀行 SMBC パーク栄は、情報提供をコンセプトとした施設で、毎月、幅広い分野のセミナーやイベントを行っている。

その一環で、筆者が出演させて頂いたシリーズコンサートを毎月開催している。このシリーズコンサートには、愛芸アシストという地元愛知県立芸術大学卒業生のサポート団体やクラシックコンサート専門の宗次ホールが企画に関わり、演奏者を紹介、斡旋する枠もある。

出演者は、クラシック系のピアニストであれば、ショパンのエチュード、バラード、バーベンのソナタなどの上級曲、難曲をサラサラと演奏し、国内外のコンクールにも入賞歴が多数あるといったレベルの人達が出演している感じであった。他にも、これまでは、

ジャズ、シャンソン、民族音楽、津軽三味線など邦楽の演奏会もあったそうである。

基本、アコースティック楽器がメインとなるコンサートが多く電子オルガンや電子楽器のソロコンサートは、同会場始まって以来の事で筆者にもそれなりのプレッシャーがあった。

普段は、会員の主な年齢層であるシニア層向けのコンサートが多いが、夏休み期間中ということで、＜夏休み特別企画＞安井正規電子オルガンスペシャルコンサートと銘打ち、子どもから大人まで楽しめる内容でコンサートを企画してみた。

また、このコンサートでは特別企画として2台のプラズマディスプレイを用意し、映像演出とともに演奏を楽しんでもらうという試みを行った。映像演出の内容は、コンサート開演前に、近年の筆者の活動写真のスライドショーの上映、演奏中は、手元、足元、全景のカメラのスイッチャー切り替えによるライブ中継、演奏曲に合わせた動画や写真の上映などである。映像演出は、最近、筆者が演奏活動をする上で力を注いでいる演出方法の一つである。

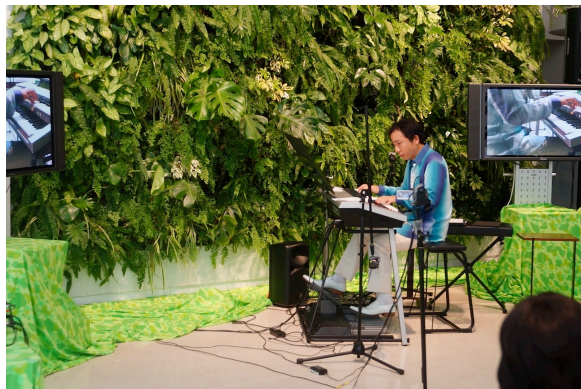


映像演出機材をチェックする筆者

こうした演奏意外の演出面に力を注ぐ背景には、筆者が肌身に感じる時代の変化の影響によるものが大きい。YouTube やニコニコ動画などの動画配信サイトでは、手軽に無料で超有名演奏家の過去の名演奏が高画質、高音質で視聴でき、スマートフォンでは、ゲーム

やデスクトップミュージックで作曲が出来てしまう時代。電子オルガンにおいても、もはやプロをも凌駕しているとも思える愛好家の渾身の一曲、超絶技巧の演奏や活動の様子が、動画サイトに多数アップされ、一般視聴者が様々なコメントを寄せている。

このような状況の中、現代電子オルガンのアドバンテージである「一人でオーケストラやバンド演奏が出来る」「リアルタイムプレイング」ということを電子オルガンの生演奏を聴いてもらうだけで、一般聴衆にそれほどインパクトを与えたり、価値や重要性を感じたりしてもらうことが難しくなっているのでは？と感じている。



それ以前に、そもそも「ライブ演奏に価値があるのか？」ということを考えている。

いや、ライブ演奏が良いに決まっている。ただ、「費用を払い、労力を使って会場に出向くまで価値を感じてもらえるのだろうか？」ということを考えているのだ。確かに良いホールに行けば、ラグジュアリーな気分になれるが、よほどの席でない限りちょっとしたオーディオルームのCD再生音と音響的に比べてどうであろうか？

ロバクやエアー演奏も一つのパフォーマンスととらえ、そのパフォーマンスに熱狂する人たちさえいる。

「生演奏＝素晴らしい」という発想は音楽を提供する側の固定観念であり、ともすれば「押しつけ」になっていないだろうか？

近年、筆者はこうした問いに、自問自答を繰り返している。

筆者は、活動を行う中で社会で電子楽器や電子オルガンに求められていることには、二つの大きな柱があると感じている。

一つ目の柱は、従来のアコースティック楽器の代用

としての利用。これは、楽器としてみるだけでなく、現代社会において例えば、蛍光灯がLED照明に代わり、雑誌や広告がインターネット配信によりペーパーレスになったり、アニメがセル画からCGに置き換わったりするなど、時代の流れの変化として受け入れざるをえない。

現に、この度のコンサートのアンケートでもクラシック曲のカバー演奏を好む層も一定数いた。その演奏家の演奏で名曲を聴きたいという気持ちが伝わってくるご意見であった。よく批判の対象になり、議論になる「二番煎じ」「中途半端なコピー」などという意見は、広く一般聴衆を対象にしたコンサートでは成立しない非常に視野狭窄に陥った意見であると感じる。

電子楽器のサンプリング音源技術が確立した現代では、電子音響技術を介さない音楽の方が少ない。「スピーカーから出る音＝電子音楽」と定義づけられる。今回のコンサートでも、この点についても言及した。

社会には、メディアや一般家庭や学校で電子楽器が広く普及しており、今後は、従来のアコースティック楽器の教育プログラムを踏襲するだけでなく、電子楽器、アコースティックにとらわれない指導者、演奏家、音楽家、プロデューサーを育成することが急務なのでは？と思う。

2つ目の柱は、テクノロジーの進歩である。もともと、電子楽器はテクノロジーの産物であると筆者は考える。電子オルガン→テクノロジーとするならば、そもそもテクノロジーに求めることとは何か？

筆者は、その回答を一言で表すなら「驚き」「新鮮さ」だと考える。「今まで出来なかったことが、出来るようになる。＝新しい世界」人は、そこに未来を感じ希望を見いだすのではないか？

例えば、前述の映像演出で言うと

「電子オルガンのコンサートで、オリジナル曲まさか初音ミクのアニメーションとコラボするなんてビックリ！！」

「曲のフレーズと動画の流れ星がシンクロしててスゴかった！！」など、こんな感想を頂いた。

これは、つまり筆者の心の中に広がる世界が視聴する相手伝わったことにも繋がる。むやみやたらに演出すれば良いという訳ではなく、自分心に浮かぶ世界を今の時代にマッチングした形でどう聴衆と共有するか？そんな視点で「驚き」「新鮮さ」を感じる演出方

法を模索した結果であった。

以上述べた2つの柱は相反する真逆のベクトルであるが「陰と陽」「保守と革新」といった関係や考えにも通じ、2つの方向性をバランスよく活動に採り入れていくことが肝要だと筆者は考える。

今回の SMBC パーク栄でのコンサート演奏終了後のお見送りの際、二つの貴重なご感想を伺った。

1つ目「肉親を亡くし深く気を落としていたが、元気をもらった。来て本当に良かった。ありがとう。(シニア女性)」

2つ目「生まれてくる子どもに、ぜひ電子オルガンを習わせたい。(妊婦さん)」

筆者は、「人や社会に役立つ音楽づくり」を目指し活動続けてきたが、自分の音楽を聴いてくれた人が一人でも喜んでくれたのなら嬉しい。

そして同時に、音楽を発信する責任も感じた瞬間でもあった。

これからも、様々な意見に耳を傾け、人や社会に役立てる音楽家を目指し、精進していきたいと思う。

(電子オルガン奏者・作編曲家 やすい まさのり)

